

第8回 「ラウダン解説6」議事録（担当：野内）

開催日時：2009年11月16日

出席者：戸田山、熊澤、石井、比屋根、長縄、鈴木、上野

1. 議題

ラリー・ラウダン（著） 小草 泰（翻訳） 戸田山和久（監修）『科学と価値—相対主義と実在論を論駁する』（双書現代哲学）第5章の解説(p. 262)。

2. 議論内容

- (1) 科学的事実論の立場の紹介
- (2) 科学的事実論の立場に対する、現場の科学者からの意見
- (3) (2)を受けた科学哲学側（戸田山）からの意見

3. 内容の詳細

(1)について

科学的事実論の定義については解説を参照のこと。ここまでの会合と関連させて補足すると、ラウダンの網状モデルは科学を「目的・方法・事実」同士の相関によって捉えようとするもの。ラウダンの考えでは、科学の目的は方法や事実しだいで移り変わることがあるという。科学的事実論は科学の目的を一意に定めてしまうのであった（科学の目的＝世界の真理を捉えること）。したがって、この意味においてラウダンは反事実論者だということになる。

(2)について

科学者側から出た疑問の主な論点は以下の二つ。

- ・ 実在の考え方がいかに研究活動に実質的な影響があるのか
- ・ 問題設定が不適切。実在という概念が曖昧すぎる

○当日のコメント

・ 素粒子物理においては、ニュートリノがとりあえず「ある」と思って研究を始めている。その意味では共通見解があるが、踏み込んでみると、考えていることは各人でバラバラだ。ニュートリノを複合粒子だという人もいれば、そうでない人もいる。（長縄）

- ・ 研究対象の実在性をどう思っているかと、実際の研究行為に違いは生じない。（石井）

・「实在」ということばで多くのことをごちゃ混ぜにしている。たとえば「地軸」は明確に定義されている [約定や規約がある]。それならば「ある」といってもよい。また、实在という言葉のボーダーラインを設定できるのか。(熊澤)

(3)について

科学的事実論、ないしはこの論争自体に否定的な意見に対しての戸田山の主張は以下。

戸田山：科学的事実論は科学の問題ではなく哲学の問題だ。

このことに関する戸田山のコメントを抜粋

- ・ われわれとは独立の世界に関する議論。科学者が研究を始める or 概念をつくる前から世界にあったものを捉えようとしている。現場では「ある・なし」はいつでも良いのは確か。現場から「外」に行くとき [研究成果の発表や報道のとき] に関係してくる。
- ・ [ある、ない論争は意味がないといってしまっただけは駄目か、という熊澤さんに反論して] 駄目だ。ある、ないは科学の重要なテーマである [例：さらなる素粒子の探求]。
- ・ [↑は事実論の都合。反事実論者から見たらどうなのか、という石井さんの反論に対して] 意味がない。しかし、科学では事実論的な言葉遣いがなされている。科学にとって実質的な議論である。
- ・ [科学の外から科学を解釈しているという事実論の話にピンとこない熊澤さんに対して] 事実という言葉の含意は議論をやっていく上で洗練されていく。また、科学者が面白がらないとしてもそれは OK。科学者が自分たちのやっていることを内省しようとしたときには面白がってくれる。
- ・ [論争自体が馬鹿馬鹿しい、ill-posed だという熊澤さんに対して] 哲学では問題がそもそも幻だったと示すことも重要な仕事。しかしまだ疑似問題だとする話は聞いたことがない。また、あるなしの境界が曖昧だということはこの論争と両立可能⇒あるかないかの線を引こうとしているのではなく、典型的にそうであるものについて論争をしている。
- ・ 科学の知につながらないかもしれないが、哲学的知の拡大につながる。